

岐阜

一握の稲穂から夢

南飛驒の小さな棚田で見つけた一握りの稲穂から夢の第一歩が始まった。

下呂市萩原町で2000年9月、出穂期を迎えたコシヒカリの田んぼを見回した際、ひときわの長い稲が目ざりかと思ったが、秋に収穫したところ、粒の大きさがコシヒカリの1・5倍ほどあった。

翌年、ほかの稲と分けて小さな田んぼに栽培し、収穫したコメを試食して驚いた。粒につやがあり、香りと粘り、甘みのある「衝撃的な味」に感動し、「新品種」と確信した。この時、「人生を変える運命を予感した」と振り返る。新品種は「龍の瞳」と命名した。「昔から龍は水の神と

日本一の味 地域に活力



「龍の瞳」を前に農業の将来を語る今井さん▼

言われる。米粒が大きく輝き、龍の瞳をイメージした」。もう一つは、自分の隆と妻のひとみさん(46)の名前にちなんだ。05年に合資会社「龍の瞳」を設立するまでの約5年、試験栽培を続けた。06年7月、農林水産省に新品種「いのち

「龍の瞳」生みの親 今井隆さん(54)



「今後の人生を賭けよう」

「一握りの稲穂から生まれた龍の瞳で自然環境を保全し、未来に夢を持てる地域づくりを一步一歩進めていきたい」と意気込みを語る。(野中敏夫)

の意」(商標・龍の瞳)として登録されたのを機に「今後

の人生を龍の瞳に賭けよう」と決意し、07年、33年間務めた農林水産省を辞めた。全国米・食味分析鑑定コンクールで06年から3年連続で金賞を受賞。07年の「あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト」では最優秀賞に輝いた。品質の安定したおいしいコメを出荷しようと、今年10月には農水省から米登録検査

機関の認証を得た。今年の契約栽培農家は、飛驒を中心に県内外に約180戸、作付面積は計約85haと大幅に増えた。コメの買い取り価格が新潟産米より高く、農家の経営安定が図れるという。「契約農家を増やし、低農薬の栽培面積を広げ、タニシやドジョウなどが生息出来る環境に優しい農地づくりを目指したい」と夢は広がる。一方で、下呂温泉の大手ホテルや旅館と提携し、「龍の瞳」を小袋詰めにして販売。手軽なお土産として観光客から好評を得ている。3月にはNPO法人「龍の瞳倶楽部」を設立し、広葉樹を育てる森の再生事業や、農村と都市との交流を増やす「棚田コンサート」の企画も手がける。「一握りの稲穂から生まれた龍の瞳で自然環境を保全し、未来に夢を持てる地域づくりを一步一歩進めていきたい」と意気込みを語る。(野中敏夫)